



JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Tuesday 20 November 2001 (afternoon)

Mardi 20 novembre 2001 (après-midi)

Martes 20 de noviembre de 2001 (tarde)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- Ne pas ouvrir cette épreuve avant d'y être autorisé.
- Rédiger un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の 1 (a) の文章と (b) の詩のうち、どちらか一つを選んで解説しなさい。
(コメントリーを書きなさい。)

1 (a)

ぼくは読書家ではない。また、モノ書き商売だから、本を読むのでもない。なにかの本を参考にしたこともない。ただ、本を読んでいる。ヒマつぶしに本を読んでもいいものだが、そう言っちゃまうと、なんだかウソっぽい気がする。ヒマというのが、そんなにはつきりしないからだ。ヒマな時間という、とくべつな時間があるわけではない。ヒマもなにもいっしょくたになって、ぼくの毎日なのだ。

読書家ではないが、コドモのときから本は読んできた。

小学生のころなど、ひょいと大人の本を読むと、コドモの本にはないおもしろさがある。それから大人の本を読みだすという経験は、だれにでもあるだろう。そんなふうにして読んだ本で、とくべつおもしろかったのは、直木三十五の『南国太平記』だった。

中学生になると、やたらになんでも読んだ。受験勉強のため、本を読むのをひかえるなんてことはなかった。

旧制高校のときも、いろんな本を読んだが、歌集と戯曲集を読んだのは、このときぐらいだろう。鶴屋南北の『四谷怪談』のがっちりした構成には感心した。

徴兵年齢のくり上げで、十九歳で兵隊にとられたときは、『聖書』と『万葉集』をもっている。本は二冊しかもっていけなかったのだ。もし、あなたが孤島で暮らすとしたら、どんな本を……といったバカな質問が実際のことになったのだ。もっとも、ぼくたち初年兵は、内地に五日いだけで、中国大陸にはこぼれ、長い行軍がはじまるとすぐ、『聖書』も『万葉集』もすててしまった。

さて、本を読むと、こういういいところがある、とぼくにはおすすめることはできない。本を読めば、なにかの知識は得るから、それで本を読む人もいるだろう。しかし、ぼくは知識を広めるような気はない。

知識みたいなものでは、どうにもならないようなことばかり気になってるのだ。自分は知識といったようなことに関心がないのに、ひとにすすめるわけにはいかない。

でも、みなさん、知識をもとめるために、小説を読むだろうか。ところが、そういう人が、あんがい女性にはおおいんだな。男でも、なにかの小説を読んで経営のヒントを得るとかさ。しかし、ぼくはそういう本の読みかたをしたことはない。

もうコドモのころから、ぼくは血となり肉となるような読書というのがいやだった。ただ漫然と本を読んではいけない、そのなかから、かならず、なにかの教訓、おまえの役にたつもの、おまえの血となり肉となるものを得なければいけない、となんときかぞれたらう。

しかし、血となり肉となるような読書をしてるらしい人が読んでいる、赤線などがいっぱいはいってる本を見ると、ゾットした。本は、ただすなおに読めばいいんじゃないの。ところが、このすなおにとか、無心にとか、先入観なしにってことが、なかなかむづかしい。いや、おおよそ不可能なことだ。

35 でも、あれこれたくさん本を読んでも、ことさら本を読むという気持ちもなく、かなりだらけて、すなおに近くなる。

本を読む時間がない、という人がいるが、本には無縁な人だろう。そんな人が時間があつて、モーレツに本を読んだって、やはり本には無縁の人だろう。これもよけいな悪口で、ただ、ぼくとは本の読みかたがちがうだけか。

(田中小実昌『やさしい男にご用心』)

田中小実昌(一九二五〜二〇〇〇)小説・随筆家。翻訳家。代表作に『ポロポロ』『……のこと』などがある。

1 (b)

初夢

除夜の鐘をききながら
金色のみかんの皮に指を立てると
押し出すようにして老人が破れから首を出した
ちよっとまあおはいり 中はあたたかい
5 (でもどうやってはいるの?)
穴をのぞきこむと頭から吸いこまれて
気がつくともかんの中にすわっていた
まるい部屋の壁はふわふわした白いものに覆われ
なるほど (中はあたたかい) のだ
10 老人の前には碁盤がおいてあり
彼は相手がほしかったらしい
黒をとったわたしを軽く負かすと
にこにこして盆のみかんをひとつくれた
わたしがそのかぐわしい皮に指を立てると
15 そこからまたべつの老人が首を出した
ちよっとまあおはいり
こうしてわたしはいくつのまるい部屋の中
みかんの中のみかんにはいりこんで遊んだことだろう
初日にめざめるとわたしのからだは
20 まぶしい金色のかおりに染まっている

(多田智満子 詩集『祝火』一九八六年)